

高等専門学校での読書指導のあり方と 学生の読書の実情(1)

田部井 大 輔

0. はじめに

高等専門学校での「読書指導」の重要性を痛感したのは、1994年4月に茨城工業高等専門学校に赴任してから半年後のことである。限られた時間内でどれだけの教育効果を挙げることができるかを模索する中で、学生に読書リストを提出させてみて、非常なる危機感をもったためである。故に本論文での実践・研究はまだ緒についたばかりであり、今後数々の模索・探求を経なければならぬものである。なお、「高等専門学校での」と限定したが、学齢を念頭に置いた指導法の模索であることに変わりはない。「高校生のための読書指導」に少しでも資することができれば幸いである。

1. 高等専門学校で「読書」を重視した理由

1-1 高等専門学校とは

高等専門学校（以下「高専」という）は、中学卒業を受験資格とする5ヵ年一貫教育の教育機関である。現在全国に国立54、公立5、私立3、の合計62校あり、その多くは「工業高等専門学校」である。ここに通う者はすべて理科系であり、工業技術等を学んでいるのである。

高専は、専門技術者の早期養成をという産業界の強い要請をうけ、昭和36年に法制化され、昭和37年度より全国で2,520名の募集を開始した。以後、校数の増加とともに募集人員も増え、平成6年度には入学定員11,030名、在学生数55,453名となっている。特色はやはり、後期中等教育と高等教育との一本化ということになる。昨今、中学・高校の6ヵ年一貫教育が私学を中心に行われているが、それは前期中等教育と後期中等教育との一本化にすぎない。中学から高校ということであれば、学習内容のソフトグラウンディングの容易な、積み上げ式の一貫教育ということになる。しかし高専の場合は、本来異質であるべき後期中等教育と高等専門教育とを同一の学校で行うのである。当然、現行の学校制度における高校1年から3年にあたる年齢の者への教育も、高等学校と同質という訳にはいかない。その年齢の者も「学生」と呼ぶ。カリキュラム面はもちろんのこと、生活指導面でも一筋縄ではいかないのである。

1-2 高専の「国語」と読書の重要性

さて、高専の「国語」はいかに行われているか。昭和51年11月に文部省より示達があった「高

等専門学校の新しい教育課程の基準について」は「各学校が独自の特色を持った教育課程を創出すること」を教育課程編成上の留意事項として、国語に関しては、1年から4年までで単位数(時間数)「9」を標準とすることを示しているだけである。『高専の国語教育』(高専教育方法改善専門委員会・国語科部会・平成3年)によれば、全国61高専(調査時)中、9単位実施が57校、10単位実施が4校となっている。中には4・5年次に選択科目の形で国語に関連する授業を行っている高専もあるにはあるが、概ね9単位で実施されていると見てよいだろう。

現在、茨城工業高等専門学校では、1年・3、2年～4年・2という割り振りにしているが、専門科目に2時間続きの授業が多いためか、国語も1年の1時間を除いては2時間連続の授業を行っている。1回の授業に多くの事項を盛り込める反面、学校行事や祝祭日に当たると、1週間に1度も授業がないという事態も起こる。なおかつ、理科系を専門とする学生である。国語に対する興味、関心が高いとは言い難い。当然指導にも制約が出てくる。このような状況下で、いかに読解力、表現力を身につけさせるかが課題となる。時間上の制約がある以上、学生個々の読書生活を充実させていくことも一つの方法と考える次第である。

加えて、半数以上の学生が卒業後社会に出る高専においては、今後、別の教育機関に読書指導を委ねることができないのである。高等教育機関で改めて「読書指導」を行うということは稀であろうが、何かのきっかけが与えられる事も有り得る。しかしながら、高専卒業生の場合はそのような機会は与えられない者が多数いることになる。つまり、ここで読書指導を怠れば、読書生活のない社会生活を送ることに成りかねないのである。

2. 読書生活の位置付け

2-1 読書の効用 1-国語科の見地から

「読書」が、国語科のみでなく広く教育の目標である「人間形成」に多大な影響を持つことを否定することは困難を極めるであろう。「読書指導」の目標の第一に「人間形成」を挙げることに異論はない。しかしながら国語科の教員として少し違った観点からも読書の効用を示す必要性を感じる。

「読書指導」と「読解指導」との違いについては、多くの先人がすでに述べられている事柄であるから、多言は要しないであろう。「行為」としての読書であり、「機能」としての読解である。しかし、読書と読解は決して対立するものではない。日々の読解指導が、読書をしている時に生きるようであれば、読解指導そのものに問題があると言い換えてもよい。反対に、読書することによって、読解能力が多少なりとも高まるとも言えまいか。国語科の教員としてはいささか消極的な物言いになるが、きちんとした読解指導の上に立った自学自習としての読書が行われていけば、多少なりとも読解力向上に資することは否定できまい。読解力のみでなく、文章表現力に影響を与えることもあり得る。読解力にしても、表現力にしても、本当に向上するのかを科学的に解明することはなかなか難しい。自分自身の非力を感じず、逆に言えば現在それを完全に

否定し得る論拠を持たないということになる。薬にはなっても毒にはならないということである。読解指導の不足を補う意味で、読書指導に力を入れるのも一つの方策ではなからうか。

しかしこれは、実践する対象がある程度の読解力・表現力を既に有しているという前提に立たなければならない。発達段階で言えば、義務教育修了、もしくはそれと同等の学力を有する者には有効だが、それ以下ではもっと精密な「読解指導」と「読書指導」の連関を図る必要のあることは言うまでもない。

2-2 読書の効用 2-社会生活的見地から

「国際化社会」・「情報化社会」など、現在の社会は様々に形容される。「情報化社会」において、読書がどのようにあるべきかが、論議の対象となって久しい。昭和53年には相谷道男氏⁹⁾が「情報化時代における読みの指導」と題して、情報化社会の読書のあり方を述べている。教育への社会的要請は「問題解決の学習」にあるとして、

またこの学習では、創られた答え自体が重要なのではなく、一般的な能力として転移しう
る解決の仕方に意義がある。つまり、「学び方を学ばせる」学習であり、それは学校図書館の
利用指導の目標・方法とも合致し、かつ「生涯教育」の基盤ともなるものである。

と述べている。そして「読む」ことの定義について、

文献を主体的に操作するという考えに立つと、「読む」こと、つまり「読書」することはす
なわち「問題解決」の過程であり、そのまま「情報処理」の過程でもあると言える。

と述べている。特に説明的文章を読むときに、その情報を自分の生活の中でどのように操作する
か（生かすか）が、現代社会に生きる者の課題というわけである。

10数年前の論であるが、社会生活を営む上で読書にかけられる期待は、やはりこの点であろう
と考える。メディアの多様化は日進月歩であるが、そうは言っても「文字記号」を媒介としたコ
ミュニケーションが途絶えるということは考えられない。本の体裁を取っていないものを「読む」
ことを「読書」とはいわないかもしれないが、行為自体は不変であろう。社会人が「読書」する
ときに求めているものは、自分にとって有益な情報を得る、という点である。情報選択能力も含
めた情報処理能力の伸長も、読書にかけられた課題となっていて、それは今なお増幅していると
言える。

2-3 読書人育成のために

高専という特殊な状況下で、いろいろ思索を重ねて行くうちに、1、人間形成。2、読解力・
表現力の向上。3、情報処理能力の向上。の3点から「読書指導」の有効性があるのではないか

と考えた。高専の特質を考慮すると、3番目の「情報処理能力」が最重要ということになる。

情報は、まず得たいという認識があって初めて自分の物となり得る。得たくないものを無理につめこもうとしても定着は難しい。すべては、意欲の問題ということになる。要は読みたいと思えるものを読むという姿勢を身につけられるかということである。主体的に読むことができるかどうかなのである。しかし、この「主体的に読む」ことを求めるのは意外に難しい。読書に限らず、「動機づけ」の難しさというのは永遠の課題のようにも思われる。

だが、ここに一つのヒントが隠されているのではなかろうか。教師が「読ませたいもの」を強要しようとするから、読むための「動機」をつけるのが難しいのではないか。逆に「読みたい」という欲求のあるもの、すでに「動機づけ」の終わっている物を探る事の方が、学生の読書生活を充実させるためには意義があるのではないかと考えるのである。

大村はま氏^⑧は、「読書人」を「本を使って生きていく人」だという。そして、その条件として、単に「読書」ととどまらず、

- 目的により、このことは「本によって…」と本をつかうことに気づく。
- どんな本があるかを知る。(まだ出ていない本までも)
- その本がどこにあるか、どうしたら手にできるか。
- 本をえらぶ。
- 読み方をえらぶ。
- さらに、ほしい本、望みの本が生まれてくるようにする。

の6点を挙げている。本を実用的に使っていく姿勢とは、1、問題を意識する。2、情報を求める。3、取捨選択する。4、思索する。5、よりよい情報を求める。という作業の繰り返しと言い換えても良いだろう。

「本を使って生きて行く人」を育てるためには、学生個々がどのような問題を意識しているか、どのような目的を持っているか、どのような分野に興味関心を持っているかによってその指導も変わらざるを得ないということになる。しかし、これは一國語教師の力量を逸脱したものと言えなくもない。飛田多喜雄氏^⑨いうところの、「広義の読書指導」^⑩の範疇であり、全校的に行わなければならない指導であろう。そうは言っても、15歳から20歳が対象となると、この年齢の者はもう既に自己の読書生活の完成期に入っていると言わなければならない。小・中学校での読書指導によってどこまで確立されているか、ばらつきが出てくるのは当然かも知れないが、それならば、なおさら個々のレベルに合わせた読書指導が要求されると言って良い。なおのこと、個人の読書の実情をつかむことが大切になって行くのである。

「情報処理能力」という面から、「読書指導」のあり方を探ると、以上のような仮定に立つことができる。しかし、単に自分に必要な情報を得るということではない、「打算的でない読書」の楽しさを無視することはできない。「読書の楽しみ」を少しでも伝えることが、國語担当の者の使命

であるとも言える。要するに、両者のバランスの取れた指導をしなければ、真に充実した読書生活を確立することはできないのである。

「読書人」とは、読書の楽しみを知っていて、なおかつ「本」を十分に活用できる人のことである。そして、それを生涯にわたって実践できることが私の「読書生活」の位置付けである。

3. 高専の学生の読書の実情

3-1 読書調査

的確な読書指導（アドバイス）を行うためには、個人の読書の実情を把握することが必要となる。個人の読書の実情を把握するため、4月と9月に半年間の読書リストを作成する方法（雑誌も含む）で読書調査を行った。今回は授業を担当している学生に限ってのことだが、今後全学的に行わなければならないことを痛感している。また、細かく項目を分けた質問紙記入の方法による調査の必要性も感じている。その調査結果、①6ヵ月間の読破冊数。②読書傾向（興味関心のある分野）。③専門に関わる雑誌等の購読状況。の3点を学年別に示す。調査数は3年（4月）-122、（9月）-120、2年-41、1年-80である。

①6ヵ月間の読破冊数（雑誌は除く）

4月の段階では何の前触れもなく調査したので、6ヵ月間に読んだ本の一部を失念した学生もいたようである。9月には事前に予告しておいたので、正確な数字に近づいていると考える。今後は、調査の回数を多くして、より正確な数字の把握に努めたい。なお、夏季休業中に「読書感想文」を課したが、9月のデータにはそのために読んだ本は含んでいない。（％は小数第3位四捨五入）

表Ⅰ. 3年（4月）総冊数637 一人当たり5.2 月一人当たり0.87

冊	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	計
人	20	14	12	12	11	11	7	9	5	4	5	1	1	0	1	3	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	1	0	1	122
%	65.57				25.40				4.92				0.81				2.46				0.81	100										

表Ⅱ. 3年（9月）休学等2 総冊数432 一人当たり3.6 月一人当たり0.6

冊	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	48	計
人	33	20	18	12	9	9	5	2	3	0	2	0	0	1	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	120
%	84.17				10.00				1.67				1.67				0.83				1.67	100											

表Ⅲ. 2年(4月)総冊数140 一人当たり3.4 月一人当たり0.57

冊	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
人	10	5	5	5	0	5	3	4	1	1	1	0	1	41
%	73.17					24.39					2.43	100		

表Ⅳ. 2年(9月)総冊数198 一人当たり4.8 月一人当たり0.80

冊	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	計
人	7	10	3	5	4	1	0	2	0	1	2	1	0	1	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	1	41
%	73.17					14.63					4.87					4.87					2.43	100					

表Ⅴ. 1年(4月)総冊数266 一人当たり3.33 月一人当たり0.55

冊	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	計
人	18	11	8	13	9	6	5	1	2	0	3	3	0	0	0	0	0	0	1	80
%	81.25					17.50					0.00					1.25	100			

表Ⅵ. 1年(9月)総冊数204 一人当たり2.55 月一人当たり0.43

冊	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	計
人	23	15	12	11	7	3	1	2	0	1	2	1	0	0	1	1	80
%	88.75					8.75					2.50					100	

②読書傾向(興味関心のある分野)

学生の読書傾向から、現在どのような分野、ジャンルに関心を持っているかを探ろうということである。しかしながら、全体で2割を越えるものが「本を一冊も読まない」という現状では、学生の興味関心を探る方法としては、必ずしも適切とは言いがたい。今後は、もっと的確に興味関心を探る方法を考えたい。今回は、学生の読んだ本の書名をすべて羅列する紙幅はない。したがって次のようなジャンルに分けて報告する。

1. 古典的小説(夏目漱石、芥川龍之介等)
2. 現代的小説(吉本ばなな等、昭和50年代以後の小説)
3. 歴史小説(『三国志』等)
4. 翻訳小説
5. エッセイ・ノンフィクション
6. SF・推理小説
7. how to 本
8. 軽い読み物(『磯野家の謎』などの近来流行している本)
9. 自然・人文・社会科学等
10. その他

3年(4月)総冊数637

1-74 2-132 3-76 4-44 5-36 6-184 7-52 8-21 9-15 10-3

3年(9月)総冊数432

1-25 2-97 3-48 4-38 5-32 6-160 7-12

8-5 9-14 10-1

2年(4月)総冊数140

1-6 2-32 3-11 4-16 5-8 6-43 7-2

8-10 9-11 10-1

2年(9月)総冊数198

1-16 2-30 3-8 4-21 5-9 6-95 7-6

8-10 9-3 10-0

1年(4月)総冊数266

1-34 2-52 3-12 4-14 5-29 6-91 7-10

8-11 9-12 10-1

1年(9月)総冊数204

1-25 2-48 3-15 4-9 5-26 6-66 7-5

8-4 9-5 10-1

③科学雑誌等の購読状況

定期的に購読している人数を挙げる。この者たちは、自らに必要な情報を得ようという意欲が顕著なものと考える。なお、③については9月のみの調査である。

3年120名中32名-26.7% 2年41名中13名-31.7% 1年80名中12名-15.0%

3-2 調査結果の考察

系統立った何らかの読書指導を行わなければ、惨憺たる結果になることを物語っているのが結果である。2年生を除いて、1年も3年も読破冊数が減少していることがそれを証明していると言ってよい。3年生にいたっては、1冊も読んでいないものが、20名から33名へと増加しているのである。読書感想文の課題を出しているのに、実際には読破冊数0という者は、限りなく0名に近いのであるが、これは自主的、主体的な読書とは言い難い。放っておくと実に3割近くが読書0ということになってしまうのである。高専の場合、3年生になると専門科目が多くなり、その分課題等も増加して、余暇に費やす時間が減少する傾向にあるが、それにしても月間1冊以上読むものが15%強(9月)ということでは、とても独自の読書生活を確立しているとは言えない。1年生も受験期にあった前6ヵ月の方が、むしろ読書量が多いのである。2年生だけは若干の増加を示しているが、如何せん調査数が少ないので明確に増えているとは断言できない。どの学年でも、授業中など折を見て、本を読むことを勧めたのだが、ただ言葉で言って任せても、とても自主的な読書などしない者が多いということが言えよう。今後「読まない」あるいは、「読めない」学生に対する指導が急務となってくる。

②のジャンルでは、すべての調査で、6、SF、推理小説が最大の数値を残している。多読す

る学生の中に、いわゆるマニア的存在がいて、数値としては非常に高くなっているのである。それを割り引いても、かなりの興味関心が集中していると言って良い。これに、2、現代的小説を加えると、3年（4月）以外はすべて、総冊数の50%を越えることになる。他に、高い数値を残したのは、3年の3、歴史小説であるが、これも6と同様、多読する学生がいた結果である。

この結果を見ると、やはり国語の教員が「読ませたい」と考えがちな、古典的小説は敬遠されがちと言ってよいだろう。ここで二つの立場が考えられる。古典的な小説を読ませることを重視するか。軽視はしないまでも、無理に読ませることはしないか。この二つの立場である。国語教師として、古くからの名作というものを読んでもらいたいという気持ちは当然起こる。だからといって「これを読め」と強制してしまえば、主体的な読書生活の育成には悪影響を及ぼしかねない。自らの嗜好で読書を進めている者に対しては、単なる強制ではない何らかの方法で、「読んでみようか」という気持ちを起こさせて行く必要がある。後者の立場で、なお方法を模索することがこの年齢の者への読書指導では有効ではないかと考える。

また、③とも関連するが、9、自然・人文・社会科学等の読破冊数が意外に少ない結果となっている。自分の専門に近い自然科学に関する本は数えるほどしかない。事前にどんなジャンルの本でも書くように指示したのだが、それが行き渡らなかったか。あるいは、このジャンルの本を読むことを「読書」とは考えない、国語科的発想が書くことを規制したのか。もしくは本当に読んでいないのか。この調査では明らかにならないが、高専の学生に必要なようになってくるのはこの分野の読書を開拓することである。「情報処理」としての読書を位置付けるとき、この分野の貧困さは目に余るものがある。専門教科の教官たちとうまく連携して、科学系読書の奨励を行う必要があるだろう。

③の結果も2年が高い数値を示している。しかし、3年の結果と大差があるとも言えない。何といっても、1年と2、3年の差は顕著である。やはり、学校生活を送る中で、必要性を感じた者が増えるということになろう。これも、国語だけではなく、全学的な対策が必要になる。また、雑誌を定期的に購読はしないまでも、ある月においては図書館などで利用するという学生がいない訳でもない。今後細かい調査を考えている。

②、③の結果から、読書から自分に必要な情報を得ようとする姿勢は、根差していないことがよく分かる。「読書」というと「文学」という旧態依然の指導が小・中学校で行われていて、それがうまく定着した者は、独自の読書生活を行い、定着しなかった者は全く本を読まないということかもしれない。小・中学校の読書指導の実態を把握していない現在、結論づけることは避けるが、昨今の学生の多様性を充分意識した指導の必要性を痛感して止まない。

4. 今後の指針—ある私案—

かなりの熱意を持って指導に当たらなければ、現在の学生の読書生活を充実させることは不可能なのである。一國語教師だけでなく、全学的な指導態勢を作り出すことも急務と言える。だが

まず、読書について多くの関わりを持つ国語を担当する者がイニシアチブを取らねばなるまい。今後、専門教科での研究が主となる4、5年生の調査も行き、そこでの「情報処理」としての読書がどのような状況にあるかを吟味した上で、専門科目の教官の助力を仰がなければならない。

また、「読書の楽しみ」を再認識させる方法も考える必要がある。「強制」ではない読書指導である。現在、私案として考えているのは、教員自身が独自の「読書生活」を行い、それを学生達に伝えていくことで、少しでも「読書の楽しみ」を認識させることはできないかということである。単なる「推薦図書」ではなく、自らが読んだ本の簡単な解説、魅力等をプリントにして定期的・継続的に配布していく。こちらの期待どおりに、多数がその本を読むとは限らないが、このことによって一人でも「読んでみようか」という気持ちが起こればそれでよい。その上で、再び定期的に読書調査を行い、読書生活の浸透度を測っていく。そしてまた、学生の嗜好に少しでも近い「本」を発掘して紹介して行く。このような作業を継続して少しでも「読書の楽しみ」を認識させていくのが、現在の最良の方法ではないかと考える。

学生の読書生活を充実させるためには、自らも充実した読書生活を行っていただかなければならない。これは、読書に限らず、広く、教育の真理であると信ずる。

注

- (1) 『国語教育基本論文集成 国語科読書指導論』p. 346～347
- (2) 「読書人の基礎能力を養うために」～前掲書 p. 290～291
- (3) 「国語科と読書指導」～前掲書 p. 64